

## 書誌情報

論 題 : Śatapatha-Brāhmaṇa 訳註 ( 1.2.1-4 )

よみ : しゃたぱたぶらーふまなやくちゅう(1.2.2-4)

英文タイトル : Śatapatha-Brāhmaṇa 1. 2. 1-4 : Japanese Translation with Notes

著 者 : 古宇田 亮修 ( KOUDA Ryōshū )

初 出 : 『大正大学大学院研究論集』第 22 号 , March, 1998, pp. 204-189.

キーワード : シャタパタ , ブラーフマナ , ヤジュル・ヴェーダ , 新月満月祭 , 古代インド

Keywords : śatapatha, brāhmaṇa, yajur-veda, darśapūrṇamāsa-iṣṭi, Ancient India

インターネット版 : PDF 形式 , 2004 年 10 月 10 日 ver. 1.00

注記 : 初出の後註形式を脚注形式に変更いたしました。またレイアウト変更に伴い , ページ番号が変わっておりますので , 引用の際はご注意願います。翻訳は節番号 , 註は註番号での引用を推奨いたします。

HP アドレス : <http://www015.upp.so-net.ne.jp/sanskrit/index.htm>

# Śatapatha-Brāhmaṇa 訳註 ( 1.2.1-4 )

古宇田 亮修

## は し が き

本稿は、Brāhmaṇa 文献全体の中でも思想史的・言語史的に特に重要な位置を占めるとされる“Śatapatha-Brāhmaṇa”(以下 ŚB.)の Mādhyandina 派伝本、Kāṇḍa 1. Adhyāya 2. Brāhmaṇa 1-4 の翻訳とそれに対する筆者の註を昨年度の拙稿(「Śatapatha-Brāhmaṇa 訳註(1.1)」、『大正大学大学院研究論集』,第21号,1997所収)に引き続き発表するものである。尚、本稿で用いたテキスト及び略号については、前稿を参照されたい。また、今回の訳出に際して参照した翻訳は Julius Eggeling によるもの(1882)のみである。Eggeling 訳から1世紀以上を経たとはいえ、本稿にも依然として誤訳が存することは間違いない。識者による御教示を切に願う次第である。

## 翻 訳

1.2.1.1 実に一方の[祭官]が素焼きの皿を[家長火に]置く[とき]、もう一方の者(= Adhvaryú-)は下碾き石・上碾き石を[黒羚羊の皮の上に置く]。実にこのように、その2つのことは同時に行われる。このように2つのことが同時に行われるのは以下の理由による。

1.2.1.2 さて、実にこのようにプロードーシャ<sup>1)</sup>なるものは祈献の頭である。その素焼きの皿(kapāla-)こそ、まさに頭蓋骨(śiṛṣṇāḥ kapāla-)である。穀粉は脳にほかならない。ゆえに、このように[頭蓋骨と脳は]実に一つの体肢である。「[われら兩人はそれを]同時に一つのものにすべし! 等しいものとすべし!」と[彼らは願う]。それゆえ、実にこのように2つのことは同時に行われる。

1.2.1.3 素焼きの皿を置く者がウパヴェーシャ<sup>2)</sup>を取る 『汝はドリシュティなり』(VS.1.17a)と[唱えて]。彼はそれとともに勇敢(dhṛṣṇú-)であるかのように火に接近するので、[ウパヴェーシャは]ドリシュティ(dhṛṣṭi-)と[も称するのである]。次に、彼はその[ウパヴェーシャ]によって祈献において[炭を]掬う。彼はそれによってこの[炭の]世話をする(upa√viṣ-)かのようなので、ウパヴェーシャ(upaveṣā-)と称するのである。

<sup>1)</sup> puroḍāśa-とは、玄米/玄麦を粉にし、水を加えて練り、焼いたもの。調理法については、永ノ尾信悟、「古代インド祭式文献に記述された穀物料理」(『国立民族博物館研究報告』,9巻,3号所収,1984)に詳しい。

<sup>2)</sup> upaveṣā-とは炭を扱うための祈献用具(yajñāyudhā-)の一種。別名dhṛṣṭi-。

1.2.1.4 彼はその[ウパヴェーシャ]によって炭を前方(ノ東方)に押し上げる 『アグニよ、生ものを食らう火を撃退すべし！屍肉を食らう[火]を追い払うべし！』(VS.1.17b)と[唱えて] 実に、この生ものを食らう[火]とは、それによって人々は調理して食べるから[そう呼ぶの]である。次に、それによって[死んだ]人間を焼くから、屍肉を食らう[火と呼ぶの]である。このように、彼はこの両方の[火]をここ(=家長火)から撃退する。

1.2.1.5 次に、炭を引き寄せる 『神々に対して祈献を行う者(=火)を運び来るべし！』(VS.1.17c)と[唱えて]「神々に祈献する者(=火)の上で焼供を料理しよう。その上で祈献を展開しよう」と[彼は考える] それゆえ、実に彼は[炭を]引き寄せるのである。

1.2.1.6 彼はその[炭]に真ん中の皿をかぶせる。実に、かつて神々は祈献を展開していたとき、阿修羅・羅刹らによる襲撃を恐れた 「魔物である羅刹らがわれらの下方から立ち現れるのではないかと。実に羅刹の撃退者は火である。それゆえ、彼はこのように[火の上に]置くのである。これ(炭)が[羅刹の撃退者]であり、他のものが[羅刹の撃退者]でないのは、これは祈献文により浄められ、祭礼に適したものと[なった]からである。それゆえ、彼は真ん中の皿をかぶせるのである。

1.2.1.7 [ゆえに]彼は[その皿を]置く 『汝は堅固なり。大地を堅固にすべし！』(VS.1.17d)と[唱えて] まさに大地の姿によって、彼はこの[皿の置き場]を堅固にする。まさにこれによって、彼は敵意に満ちた対抗者を追い払う 『ブラフマンを敬愛し、クシャトラを敬愛し、親族を敬愛する汝を置かん、対抗者の殺害のために』(ibid.)と[唱えて] 実に祈献文において祈願は頻繁である。ゆえに彼は[この祈献文によって]ブラフマンとクシャトラという2つの勇力を請い求める。『親族を敬愛する[汝]を』と唱えるのは、実に親族とは裕福であり、その裕福を彼は追い求めるからである。『置かん、対抗者の殺害のために』と[唱えるの]は、彼が呪詛を願わない場合である。しかしながら、もしも彼が呪詛を願うならば、『何某の殺害のために』と彼は唱えるべきである<sup>3)</sup>。その[皿]は左手の指によって触られるものとなる。

1.2.1.8 次に、[右手で]炭を引き寄せる 「魔物である羅刹らがこの場所に入り来ることなかれ！」と[願って] なぜならば、ブラーフマナは羅刹らの撃退者であるから。それゆえ、[皿は]左手の指によって触られるものとなるのである。

1.2.1.9 次に、炭をかぶせる 『アグニよ、ブラフマンをつかむべし！』(VS.1.18b)と[唱えて] 「魔物である羅刹らがこの場所に入り来ることなかれ！」と[願いつつ] なぜならば、アグニは羅刹らの撃退者であるから。それゆえ、彼はその[炭]をかぶせる。

1.2.1.10 次に、後方に位置するその[皿]を[家長火に]置く 『汝は土台なり。空界

---

<sup>3)</sup> 以上2文を1文に訳したEggeling訳は誤訳と思われる：“When he says, ‘I put on thee for the destruction of the enemy,’ whether or not he wishes to exorcise, let him say, ‘for the destruction of so and so!’” (BrāhmaṇaにおいてMantraはsatyá-と考えられるので、願望とMantraの矛盾を容認することはありえない)。

を堅固にすべし!』(VS.1.18b)と[唱えて]、まさしく空界の姿によって彼はまさにこの[祈献]を堅固にする。まさにこれによって彼は敵意に満ちた対抗者を追い払う『ブラフマンを敬愛し、クシャトラを敬愛し、親族を敬愛する汝を置かん、対抗者の殺害のために』(ibid.)と[唱えて]

1.2.1.11 次に、前方に位置するその[皿]を[家長火に]置く『汝は支柱なり。天界を堅固にすべし!』(VS.1.18c)と[唱えて]、まさしく天界の姿によって彼はまさにこの[祈献]を堅固にする。まさにこれによって彼は敵意に満ちた対抗者を追い払う『ブラフマンを敬愛し、クシャトラを敬愛し、親族を敬愛する汝を置かん、対抗者の殺害のために』(ibid.)と[唱えて]

1.2.1.12 次に、右側(南方)に位置するその[皿]を[家長火に]置く『あらゆる領域のために汝を置かん』(VS.1.18b)と[唱えて]、これら[3つ]の世界を越えて存在するか否か[不明の]まさに第4の[世界]によってこそ、彼はこの敵意に満ちた対抗者を追い払う。実にこれら[3つ]の世界を越えた第4の[世界]が存在するか否かは不明である。また、あらゆる領域とは何かも不明である。それゆえ彼は唱える『あらゆる領域のために汝を置かん』と。実に彼は黙ってもう一方の皿を置く、もしくは『汝らは積み重ねるものにして、高く積み重ねるものである』(e)と[唱えて]

1.2.1.13 次に、炭を[皿に]かぶせる『ブリグやアンギラスらの熱によって汝らは熱さるべし!』(VS.1.18f)と[唱えて]、実に、このようにブリグ・アンギラスらの輝きは最も輝かしいものである。「十分に熱されんことを!」と[願う]がゆえに、彼はその[皿]に[炭を]かぶせる。

1.2.1.14 次に、下碾き石・上碾き石を[黒羚羊の皮の上に]置く者が、黒羚羊の皮を取り上げる『汝は至福なり』(VS.1.19a)と[唱えて]、[次に]彼はそれを振る『羅刹は振り落とされり。容赦なきものらは振り落とされり』(b)と[唱えて]、まさにこれこそが、神秘的連関<sup>4)</sup>である。彼は[黒羚羊の皮を]首を西に向けて広げる『汝はアディティの皮なり。アディティは汝に気づくべし!』(c)と[唱えて]、まさにこれこそが、神秘的連関である。

1.2.1.15 次に、下碾き石を置く『汝はお椀なる岩なり。アディティは汝に気づくべし!』(VS.1.19b)と[唱えて]、なぜならば、お椀にして[かつ]石であるから。『アディティは汝に気づくべし!』と[彼が唱えるの]は、この黒羚羊の皮との協調を説いているのである。「互いに傷つけ合うことなかれ!」と[願って]、まさしくこれは姿からして大地である。

1.2.1.16 次に、先端を北に向けてシャミヤーを置く『汝は天界の支柱なり』(VS.1.19e)と[唱えて]、[それは]姿からして空界にほかならない。なぜならば、この天地両界は空

<sup>4)</sup> bāndhu- . 前稿では「趣旨」と訳したが、本稿では「神秘的連関」に統一した。この語によって代表されるBrāhmaṇa特有の思考法については:Cf. Smith, Brian K., *Reflections on Resemblance, Ritual, and Religion*, Oxford Univ. Press, 1989.

界によって分割されているから。それゆえ彼は唱えるのである 『汝は天界の支柱なり』と。

1.2.1.17 次に、上碾き石を置く 『汝はお椀なる岩娘 (pārvateyī-) なり。岩 (parvatī-) は汝に気づくべし！』(VS.1.19f) と [唱えて] なぜなら、それは若い娘のようなものであるから。それゆえ彼は唱える 『岩娘なり』と。『岩は汝に気づくべし！』と [唱える] のは、なぜなら同類のものは好意をもつからである。ゆえに彼はこのように下碾き石と上碾き石の協調を説いているのである 「互いに傷つけ合うことなかれ！」と [願って] これは姿からして天界にほかならない。下碾き石・上碾き石は両顎にほかならない。シャミヤーは舌にほかならない。それゆえ彼はシャミヤーもろとも [下碾き石・上碾き石を] 打ち合わせる。なぜならば、[ひとは] 舌によって語るからである。

1.2.1.18 次に、焼供を [下碾き石の上に] 置く 『汝は穀粒なり。神々を満足さすべし！』(VS.1.20a) と [唱えて] なぜならば、穀粒が神々を満足させると [考えて]、焼供が使われているからである。

1.2.1.19 次に、[焼供を] 碾く 『プラーナのために汝を、ウダーナのために汝を、ヴィヤーナのために汝を [碾かん] 寿命<sup>5)</sup>のために [息の] 長い持続を維持せんことを！』(VS.1.20b-e) と [唱えて] 彼は [皮の上にそれを] 注ぐ 『黄金の手をもつサヴィトリ神は傷穴のない手によりてわれらをつかむべし！ [祈献主の]<sup>6)</sup> 眼のために汝を [見つめん]！』(e) と [唱えて]

1.2.1.20 このようにして彼が碾くのは、実に神々にとって焼供は生き物であるが、不死なるものにとって不死であるからである。次に、彼らは搗鉢・搗粉木と下碾き石・上碾き石によって焼供という祈献物<sup>7)</sup>を叩き殺す。

1.2.1.21 『プラーナのために汝を、ウダーナのために汝を』と彼が唱えるとき、彼はプラーナとウダーナを置くのである。『ヴィヤーナのために汝を』と [唱えるとき]、彼はそのヴィヤーナを置くのである。『寿命のために [息の] 長い持続を維持せんことを！』と [唱えるとき]、彼はその寿命を置くのである。『黄金の手をもつサヴィトリ神は傷穴のない手によりてわれらをつかむべし！』とは「つかみやすいものであれ！」ということ [述べているのである] 『眼のために汝を [見つめん]』と [唱えるとき]、その眼を置くのである。実にこれらは生き物において存在するから。さてこのように神々にとって焼供は生き物にほかならず、不死なるものにとって不死にほかならない。それゆえ、このように彼は碾くのである。彼らが穀粉を碾き、皿を熱する [間に]、(以下後続)

<sup>5)</sup> āyus- の語義については： Cf. J. Gonda, *Selected Studies*, VI. pt. 2, pp. 500–512.

<sup>6)</sup> Mahīdhara ad VS. により補う。

<sup>7)</sup> haviryajñā-. yajñā- という語はŚB. においては、大別して「祈りを捧げること」、「祈りとともに供物を捧げること」、「祈りとともに捧げられる供物」という3種の意味をもつ。ここでは第3の意味で用いられている。

1.2.1.22 次に、一人の[祭官]がアー ज्या<sup>8)</sup>を注ぎ出す。実に神格のために告げられ、つかまれた焼供は、告げられた限りの神格にのみ捧げられたものとなる<sup>9)</sup>。ゆえに彼は別の祈献文とともにつかむ。実にいかなる[特定の]神格に対しても、アー ज्याという焼供をつかみながら告げることはない。それゆえ、彼は説明不能の祈献文とともにつかむ『汝は偉大なるものらの乳なり』(VS.1.20g)と[唱えて]、さて、偉大なるものらとは、実にこれらの牛たちの一名である。実にそれはこのように彼らの乳(=牛乳)となる。それゆえ彼は唱えるのである『汝は偉大なるものらの乳なり』と。さてこのようにして、じじつ彼のこれ(=アー ज्या)はまさに祈献文とともにつかまれるものとなる。まさにそれゆえに彼は言うのである『汝は偉大なるものらの乳なり』と。

1.2.2.1 [次に]彼は濾過具を備えたものの中に[穀粉を]注ぎ込む、[即ち]皿の上に2つの濾過具を置き、『サヴィトリの激励において、アシュヴィン双神の両腕によりて、プーシャンの両手によりて、汝を注ぎ込まん』(VS.1.21ab)と[唱えて]、まさにこれこそがこの祈献文の神秘的連関である。

1.2.2.2 次に、ヴェーディの内部に坐る。次に一人の[祭官]が差し水(upasárjanī-)をもってやって来る。彼はその[水]を2つの濾過具を通して受け取る『水は草本と混ざるべし!』(VS.1.21c)と[唱えて]、なぜならば、このようにして水は草本[即ち]この穀粉と混合するから。『草本はエッセンス(rása-)と混ざるべし!』(c)と[唱えるの]は、なぜならこのようにしてこの草本はエッセンスと、この穀粉は水と混合するからである。なぜならば、これらのエッセンスは水であるから。『輝けるものは生き物と混合さるべし!』(c)と[唱えるの]は、輝けるものは水であり、生き物は草本であるから。またなぜならば、この両者は混合されるからである。[続いて]『蜜をもつものは蜜をもつものと混合さるべし!味のあるものは味のあるものと混合さるべし!』(c)と、このように彼は唱える。

1.2.2.3 次に、[水と穀粉を]混ぜる『生殖のために汝を混ぜん』(VS.1.22a)と[唱えて]、繁栄のために、食物のために、祈献主のためにこれらの子孫を拡大するように、実にそのように彼はそれを混ぜる。また今まさに[火の上に]載せようとしている彼は「火の上に載せる[プロードーシャ]が生ずるように!」と[願って]混ぜるのである。実にこのように彼はそれを混ぜる。

1.2.2.4 次に、もしも2種の焼供があるならば、彼は[それを]2つに分ける。実に満月祭の日には2種の焼供が存在する。彼はそこで混ぜ合わせることをないようにして、それに触る『これはアグニのもの。これはアグニ・ソーマのもの』(VS.1.21bc)と[唱えて]、実に彼らは最初にこのように焼供を別々につかむ。それを彼らは一緒に脱穀する。それを

<sup>8)</sup> ájya- . 祭式において最も一般的に用いられる供物であるバター油(もしくは凝固したバター)を指す。

<sup>9)</sup> 即ち「神々の間に闘争を引き起こしてはならないので、ここでは神の名を挙げることはない」という意。A. Minard, *La Subordination dans la Prose Védique, Études sur le Śatapatha-Brahmaṇa. -I., §. 213* には2種の解釈が併記されているが、ここでは後者の訳に従った(“une oblation est dédiée à autant de divinités qu’<on en nomme> en la saisissant” )。

彼らと一緒に碾く。それを彼 (= Adhvaryú-) は再び別々にする。それゆえ、彼はこのように触るのである。彼はプロードーシャを [ 火の ] 上に載せる。このもの (= Agnídh-)<sup>10)</sup> はアージャを [ 火の ] 中に入れる。

1.2.2.5 ゆえに実にこの2つのことは同時に行われる。この2つのことが同時に行われるのは、実に祈献の本体 (ātmán-) の半分がアージャであるとき、もう半分は焼供となるからである。[ 彼は願う ] 「あの半分とこの半分というその両者を火に到達さすべし！」と。それゆえ、実にこの2つのことは同時に行われるのである。そしてまた、このようにして祈献の本体は合併されるのである。

1.2.2.6 [ ゆえに ] このもの (= Agnídh-) はアージャを [ 火の ] 中に入れる 『液汁のために汝を』(VS.1.22d) と [ 唱えて ] 『液汁のために汝を』とは、彼は降雨のために唱えるのである。彼は再びそれを [ 火から ] 取り出す 『滋養のために汝を』(VS.1.30c) と [ 唱えて ] 雨から生じる滋養というエッセンスのために、彼はそれを唱えるのである。

1.2.2.7 次に、プロードーシャを [ 火の ] 上に載せる 『汝は鍋 (gharmá-) なり』(VS.1.22e) と [ 唱えて ] これを彼はまさに祈献物とする。ちょうど鍋を [ 火の ] 上に置くのと同様に、彼は [ プロードーシャを火の ] 上に置く 『万物の寿命なり』(e) と [ 唱えて ] 彼はその寿命を置くのである。

1.2.2.8 [ 次に ] それを [ 皿の上に ] 押し広げる 『平らに広がるものよ、平らに広がるべし！』(VS.1.22f) と [ 唱えて ] 彼はこのようにそれを押し広げる 『汝の祈献の主は平らに広がるべし！』(f) と [ 唱えて ] 実に祈献の主は祈献主である。ゆえに、まさに祈献主のために彼はこのように祈願 (āśís-) <sup>11)</sup> を勧請するのである。

1.2.2.9 彼はそれを決して広くし [ 過ぎ ] てはならない。広くし [ 過ぎ ] るならば、彼はそれを人間に属するもの (= 人間が食べるプロードーシャ) にするからである。実に祈献にとって人間に属するものは罪深いものである。[ 彼は願う ] 「祈献において罪深いことをなすことなかれ！」と。それゆえ、彼はそれを広くし [ 過ぎ ] てはならないのである。

1.2.2.10 「[ それを ] 馬の蹄の大きさにすべきである」と、かつて人々は言った。[ しかし ] 馬の蹄の大きさがどれくらいかを誰が知っているというのか？彼は自ら心の中でそれを広くし過ぎないように考えた大きさにすべきである。

1.2.2.11 彼は水とともにそれに触る、一回もしくは三回。彼はここにおいて何であれ、これに属するものを彼は打ちのめすか、碾くか、傷つけるか、もしくは引き裂くのである。水は寂静である。ゆえに水という寂静によって彼は [ 罪を ] 鎮める。彼はそれを水と結合する。それゆえ彼は水とともにそれに触るのである。

1.2.2.12 [ ゆえに ] 彼は触る 『アグニは汝の皮を傷つけることなかれ！』(VS.1.22g) と [ 唱えて ] 実に彼はこのように火によってそれを熱しながら、『彼は汝の皮を傷つけることなかれ！』と唱えるのである。

<sup>10)</sup> Sāyaṇaに従う。

<sup>11)</sup> Cf. J. Gonda, *Prayer and Blessing, Ancient Indian Ritual Terminology*, Leiden, 1989.

1.2.2.13 彼はそれを火で取り囲む。傷穴のないそれを彼はこのように火によって取り囲むのである。「魔物である羅刹らがそれを捕らえることなかれ！」と[願って]。なぜならば、火は羅刹らの撃退者であるから。それゆえ彼は火で取り囲むのである。

1.2.2.14 [次に]それを焼く『サヴィトリ神は汝を焼くべし!』(VS.1.22h)と[唱えて]。実にこれを焼くものは人ではなく、神であるから。ゆえにまさしく神にほかならないサヴィトリがそれを焼くのである。[続いて]『最高の天空において』(h)と[彼は唱える]『最高の天空において』と彼が唱えるとき、「神々の間で」[という意味で]唱えるのである。彼はそれに触る「焼かれたことを確認しよう」と[考えて]。それゆえ実に彼は触るのである。

1.2.2.15 [ゆえに]彼は触る『恐れることなかれ!畏縮することなかれ!』(VS.1.23a)と[唱えて]「汝は恐れることなかれ!汝は畏縮することなかれ!なぜなら、人間である私が人間でない汝に触る[にすぎない]から」と彼は言っているのである。

1.2.2.16 [プロードーシャが]焼けたとき、彼は[それを灰で]覆い隠す「魔物である羅刹らがこれを見おろすことなかれ！」と[願って]、そして「また、裸のように[あるいは]脱がされたように寝かされることなかれ！」と[願って]。それゆえ、実に彼は覆い隠すのである。

1.2.2.17 [ゆえに]彼は覆い隠す『祈献物が活気あらんことを!祈献主の子孫が活気あらんことを!』(VS.1.23b)と[唱えて]。[彼は願う]「私がこれを[灰で]覆い隠すとき、祈献もしくは祈献主がこれによって窒息することなかれ！」と。それゆえ、このように[唱えながら]彼は覆い隠すのである。

1.2.2.18 次に、お椀洗い用・指洗い用水をアープティヤ(水神)たちに注ぎかける。彼がアープティヤたちに注ぎかけるのは以下の理由による。

1.2.3.1 かつて、実にアグニは太初において4度選任されたものであった。最初に[神々が]<sup>12)</sup>ホートリ職のために選び出したアグニは消え去った。2度目に選び出された[アグニ]も消え去った。3度目に選び出された[アグニ]も消え去った。さて、[神々が4度目に選び出した]アグニは恐怖により身を隠し、水に入った。神々は彼を発見し、まさに力づくで水から引っぱり出した。彼は水を吐き出した「彼ら(神々)が汝らから私を無理に連れ出すので、避難所でない汝らは吐き出されたのだ」と[言って]。それゆえ、アープティヤは、トリタ、ドヴィタ、エーカタとして生じたのである。

1.2.3.2 彼らはインドラとともに歩き回った。ちょうどブラーフマナが目前にいる王の後をついて歩くように。トヴァシュトリの息子である3つの頭をもつヴィシュヴァルーパーを彼(インドラ)が殺害したとき、彼ら(アープティヤ)も彼(インドラ)が[次に]殺されることに気づいた。その直後、まさにトリタが彼を殺害した。インドラは確かにその[罪]から解放されたのである。なぜならば、彼は神であるから。

1.2.3.3 そして、彼らは言う「彼(インドラ)が殺されることを知ったものたちは罪穢

<sup>12)</sup> SBK.により補う。



に近づくべし！」と。「なぜか？」と[問われれば]「まさに祈献こそが彼ら(アープティヤ)の上に[罪穢を]拭き落とすべし！」と[彼らは言う] ゆえに、彼らがお椀洗い用・指洗い用水を注ぎかけるとき、このように祈献は彼ら(アープティヤ)の上に[罪穢を]拭き落とすのである。

1.2.3.4 さて、そのアープティヤたちは言う 「われらは、このものをして、われらの前を過ぎ去らせてやろう！」と。「誰を？」と[問われれば]「謝礼なしに焼供を祈献する人々をである」と[彼らは言う] それゆえ、人はは謝礼なしに焼供を祈献してはならない。そのとき、祈献はアープティヤたちの上に[罪穢を]拭き落とし、アープティヤたちは謝礼なしに焼供を祈献する人の上に[罪穢を]拭き落とすからである。

1.2.3.5 それゆえ、神々はこれら[残りの穀粒]を新月満月祭の謝礼、即ちアンヴァーハーリヤ<sup>13)</sup>と定めた 「焼供を謝礼なしで捧げることなかれ！」と[考えて] ゆえに彼は[水をそれぞれのアープティヤに]別々に注ぎかける。そのようにして、彼は彼ら[神々]に闘争を起こさせないのである。ゆえに彼は熱するのである。そのようにして彼はこれらを沸騰させる。彼は注ぎかける 『トリタのために汝を、ドヴィタのために汝を、エーカタのために汝を』と[唱えて] さて、実にこのプロードーシャなるものは犠牲獣として殺される。

1.2.3.6 さて、実に太初において神々は人を犠牲獣として殺した。彼が[犠牲として]殺されたとき、肉汁は[彼の身体から]逃げ出した。その[肉汁]は馬の中に入った。彼ら[神々]は馬を[犠牲として]殺した。その[馬]が[犠牲として]殺されたとき、肉汁は[馬の身体から]逃げ出した。その[肉汁]は牛の中に入った。彼ら[神々]は牛を[犠牲として]殺した。その[牛]が[犠牲として]殺されたとき、肉汁が[牛の身体から]逃げ出した。その[肉汁]は羊の中に入った。彼ら[神々]は羊を[犠牲として]殺した。その[羊]が[犠牲として]殺されたとき、肉汁は[羊から]逃げ出した。

1.2.3.7 その[肉汁]はこの大地の中に入った。彼ら[神々]は掘り出すようにして彼を探した。彼らは2つのもの[即ち]この米と大麦を見つけた。それゆえに、現在でもこれら2つを掘り出すようにして探すのである。さて、このように知る人の焼供は、実に彼に対しすべての犠牲獣が殺された際と同じくらいの効力をもつ。そしてここにおいて「5つから成る犠牲獣」と人々が呼ぶ、かの完全性が存在するのである。

1.2.3.8 さて[焼供は]碾かれたとき、毛となる。次に、彼が水を注ぎかけるとき、それは皮となる。次に、彼が[それを]混ぜるとき、それは肉となる。なぜならば、それはそのとき伸ばされたようなものであり、肉は伸ばされたようなものであるから。さて、それは焼かれたとき、骨となる。なぜならば、それはそのときごつごつしたようなものとなり、ごつごつしたようなものこそ骨であるから。今まさに[火の中から]取り出そうとしてい

<sup>13)</sup> anvāhāryā-「補わるべきもの」とは、新月満月祭においてpuroḍāśa-を作る際に余った穀粒から作られる、祭官に対する謝礼としての粥。Cf. Egging, p. 49, n. 1; pūrtā-「(祭官に)贈られたもの」の代表としての anvāhāryā-については、阪本(後藤)純子、「iṣṭāpūrtā-「祭式と布施の効力」と来世」(今西順吉教授還暦記念論集『インド思想と仏教文化』, 1996, pp. 882-862 所収)を参照。

る彼がそれに〔アージャを〕振りかけるとき、彼はそれを随として置くのである。これが「5つから成る犠牲獣」と人々が呼ぶ、完全〔なる犠牲獣〕である。

1.2.3.9 彼ら〔神々〕が人間を〔犠牲として〕殺したとき、それは猿人（ノ野人）<sup>14)</sup>となった。馬と牛であったものはガウラ<sup>15)</sup>とガヴァヤ<sup>16)</sup>となった。彼ら〔神々〕が羊を〔犠牲として〕殺したとき、それはラクダとなった。彼ら〔神々〕が雄山羊を〔犠牲として〕殺したとき、それはシャラバ<sup>17)</sup>となった。それゆえ、これらの犠牲獣を食べてはならない。これらの犠牲獣はすでに肉汁（médha-）に去られたのだから。

1.2.4.1 かつてインドラがヴリトラめがけてヴァジュラを投げつけたとき、その投げられた〔ヴァジュラ〕は4つ一組になった（= 4つに割れた）。彼（= Adhvaryú-）のもつ木剣が3分の1もしくはその程度に〔相当し〕、祭柱が3分の1もしくはその程度に〔相当し〕、荷車が3分の1もしくはその程度に〔相当した〕。それが投げつけられたとき、その断片は砕けた。それは落ちて、いくつかの矢となった。それゆえ、それは砕ける（√śr̥-）がゆえに矢（śara-）と称するのである。このようにしてヴァジュラは4つ一組となったのである。

1.2.4.2 それゆえ、ブラーフマナたちは祈献において2つによって遂行し、王侯階級の人々は戦闘において2つによって〔戦う〕のである。〔即ち〕ブラーフマナたちは祭柱と木剣によって〔祈献を遂行し〕、王侯階級の人々は戦車と矢によって〔戦う〕。

1.2.4.3 彼（= Adhvaryú-）が木剣を手にとるとき、ちょうどインドラがヴリトラめがけてヴァジュラを持ち上げるのと同様に、彼はこの邪悪な敵意ある対抗者めがけてヴァジュラを持ち上げるのである。それゆえ、実に彼は木剣を手にとるのである。

1.2.4.4 彼はそれを手にとる 『サヴィトリ神の激励において、われはアシュヴィン双神の両腕によりて、プーシャンの両手によりて汝を取らん、神々のために祭祀（adhvará-）を催した〔汝〕を』（VS.1.24a-b）と〔唱えて〕。実にサヴィトリは神々の激励者である。ゆえに彼はこのようにそれをまさしくサヴィトリに激励されたものとして手にとる。『アシュヴィン双神の両腕によりて』と〔唱えるの〕は、アシュヴィン双神は〔2人の〕アドヴァリユだからである。ゆえに、まさに彼らの両腕によって取るのであって、自分の〔両腕〕によってではない。『プーシャンの両手によりて』と〔唱えるの〕は、プーシャンは分配者だからである。ゆえに、まさに彼の両手によって取るのであって、自分の〔両手〕によってではない。実に、これ（木剣）はヴァジュラである。それを保持することのでき

<sup>14)</sup> kimpúruṣa-. 語義については：Cf. Eggeling, p. 51, n. 3; *AiGr. Nachträge zu Bd. II*, 1, p. 27; S. S. P. Sarasvati, *The Critical and Cultural Study of the Śatapatha-Bṛāhmaṇa*, pp. 269–270, Delhi, 1988; Smith, Brian K., *op. cit.*, p. 178, n. 23.

<sup>15)</sup> gaurá- とは、Macdonell & Keith, *Vedic Index of Names and Subjects*, s. v. によると、牛の一種（学名 *Bos gaurus*）。

<sup>16)</sup> gavayá- とは、Macdonell & Keith, *op. cit.*, s. v. によると、牛の一種（学名 *Bos gavaeus*）。

<sup>17)</sup> śarabhá- とは、Macdonell & Keith, *op. cit.*, s. v. によると、AV.以降に登場する野獣の一種。古典梵語文学においては、雪山に住む8本足の伝説上の野獣であり、ライオンや象の敵として描かれる。Eggelingもこの伝統的な解釈に従っている（p. 52, n. 1）が、Macdonell & Keithはおそらく鹿の一種であると推測する。

る人は存在しない。[それゆえ]彼はこれらの神格らとともにそれを手にとるのである。

1.2.4.5 『神々のために祭祀を催した[汝を]取らん』と[唱えるの]は、実に祈献は祭祀であるから。[ゆえに]「神々のために祈献を催した[汝]を」ということを述べているのである。彼はそれを左手に取り、右手によってそれに触って低唱する。このように彼は彼が低唱するものを研ぎすますのである。

1.2.4.6 [ゆえに]彼は低唱する 『汝はインドラの右腕なり』(VS.1.24c)と。実にインドラの右腕は最も強力である。それゆえ、彼は唱えるのである 『汝はインドラの右腕なり』『千のとげをもち、百の刃をもつものなり』と。実に彼がヴリトラめがけて投げつけたそのヴァジュラは千のとげをもち、百の刃をもつものであった。このようにして、彼は[木剣を]まさにその[ヴァジュラ]にするのである。

1.2.4.7 『汝は鋭い刃をもつヴァークなり』(VS.1.24c)と[彼は唱える]。実に、この自ら吹くもの(=風)は最も鋭い刃である。なぜならば、これはこれらの世界を横断して吹くからである。[ゆえに]彼はまさにそれを研ぎすますのである。このように『[汝は]敵の殺害者なり』(c)と[唱えるの]は、彼が呪詛を願わない場合である。しかしながら、もしも彼が呪詛を願うならば『[汝は]何某の殺害者なり』と唱えるべきである<sup>18)</sup>。それが研ぎすまされたとき、彼はそれによって自分もしくは大地に触れることはない。「この研ぎすまされたヴァジュラによって自分もしくは大地を傷つけることなかれ！」と[考えて]それゆえ、彼は[その木剣によって]自分にも大地にも触れることはないのである。

1.2.4.8 実に神々と阿修羅たちというプラジャーパティに由来する両者は争っていた。そして、その神々はいつも阿修羅たちに打ち勝っていたのだが、そのたびごとに[阿修羅たちは]いつも彼ら[神々]に再度立ち向かったものである。

1.2.4.9 さて、その神々は言った 「実にわれらは阿修羅たちに打ち勝った。しかしながら、その後も彼らは再度立ち向かってくる。今や、どうしたら彼らを[再び]撃退する必要のないように打ち勝つことができるのか？」と。

1.2.4.10 すると、そのアグニは言った 「実に彼らは北方に向かって逃走して、われらから解放されるのである」と。かつて[阿修羅たちは]いつも北方に向かって逃走して、彼ら[アグニ]から解放されていたものである。

1.2.4.11 そして、そのアグニは言った 「われは北方に向かってめぐり歩くであろう。すると汝らはこの場所に押しかけるであろう。われらは彼らを閉じ込めてから、これらの世界に[彼らを]降ろそう<sup>19)</sup>。彼らはこれら[3つ]の世界を越えた第4の世界から再び上昇することはない」と。

1.2.4.12 そのアグニは北方に向かってめぐり歩いた。すると彼ら(他の神々)はこの場所に押しかけた。彼らを閉じ込めてから、これらの世界に[彼らを]降ろした。彼らはこ

<sup>18)</sup> 註3)の箇所と同じ構文。

<sup>19)</sup> abhi-ni√dhā-のFuture. abhi-ni√dhā-が接触対象( / 目的地)のInstr.とともに用いられて‘opérer un contact’を意味することについては：Cf. A. Minard, *Trois Énigmes*, II, § 224a.

れら [ 3つ ] の世界を越えた第 4 の世界からは再び上昇することはなかった。ゆえに、これは類縁関係により<sup>20)</sup>、スタンバ・ヤジュス<sup>21)</sup>と同じである。

1.2.4.13 北方に向かってめぐり歩くこのアグニードこそ、まさにアグニである。まさにアドヴァリユは類縁関係により彼らをこの場所に閉じ込める。彼らを閉じ込めてから、彼はこれらの世界に [ 彼らを ] 降ろす。これら [ 3つ ] の世界を越えた第 4 の世界から彼らが再び上昇することはない。それゆえ、今でも阿修羅たちは上昇することはないのである。なぜなら、神々がそれによって彼らを遠ざけるものによって、今でもブラーフマナたちは祈献において彼らを遠ざけるからである。

1.2.4.14 祈献主に対して悪意を抱き、かつ嫌うものを、彼 ( 祈献主 ) はこのようにこれら [ 3つ ] の世界に降ろし、第 4 の [ 世界 ] がこれら [ 3つ ] の世界を越えるとき、彼はこれら一切の世界が安立する [ 大地 ] から一切のものを投棄するのである。「空界を投棄せん！天界を投棄せん！」と [ 唱えつつ ] 投棄すべきとき、彼は何を投棄するというのか。それゆえ、彼はまさにこの [ 大地 ] から、一切のものを投棄するのである。

1.2.4.15 次に、彼は草を [ 彼と祭火との ] 間に置いて [ 木剣を ] 投げつける 「この研ぎすまされたヴァジュラによって大地を傷つけることなかれ！」と [ 考えて ] それゆえ、彼は草を [ 彼と祭火との ] 間に置いて [ 木剣を ] 投げつけるのである。

1.2.4.16 [ ゆえに ] 彼は [ 木剣を ] 投げつける 『大地よ、神に祈献するものよ！われが汝の草本の根を傷つけることなかれ！』(VS.1.25a) と [ 唱えて ] 実に彼はその [ 大地 ] を地上の根のように扱ふ。その [ 大地 ] を [ 木剣によって ] 取り上げながら、彼はこのように述べる 『われが汝の草本の根を傷つけることなかれ！』と。彼は [ それを ] 置こうとするとき、『牛の住まいである放牧地 ( 柵に囲まれた土地 ) に行くべし！』(b) と [ 唱える ] 彼はこのように逃げ去ることのないようにする。なぜなら、それは放牧地にいるときは、逃げ去ることがないから。それゆえ、彼は唱えるのである 『牛の住まいである放牧地に行くべし！』と。[ 続けて彼は唱える ] 『天は汝に雨降るべし！』(c) と。その [ 大地 ] を掘るとき、彼らは [ それを ] 負傷させ、打ちのめす。水は静寂である。ゆえに彼は水という静寂によって鎮める。ゆえに彼は [ 大地を ] 水と結合させる。それゆえ、彼は唱えるのである 『天は汝に雨降るべし！』と。[ 続けて彼は唱える ] 『サヴィトリ神よ、[ それを ] この大地の果てと結びつけるべし！』(d) と。彼はまさにサヴィトリ神にこのように述べているのである 「それを真暗な闇と結びつけるべし！」と。彼が『この大地の果てと、百の縄によって』(d) と [ 唱えるの ] は、逃げさせないためである。これに関して、『われらを嫌うもの、またわれらが嫌うものをこの場所から解放することなかれ！』と彼が唱えるのは、彼が呪詛を願わない場合である。しかしながら、もしも彼が

<sup>20)</sup> “nidānena” Cf. 服部正明、『古代インドの神秘思想』(講談社現代新書), pp. 56–57(「親縁関係により」); Smith, Brian K., *op. cit.*, esp. pp. 78–81.

<sup>21)</sup> stambayajus[harāṇa]- とは、祈献文 ( yajus- ) を唱えながら、木剣によって草の束 ( stamba- ) を切って vedi- にばらまく所作をいう。Cf. K. Mylius, *Wörterbuch des Altindischen Rituals*, s. v.

呪詛を願うならば、『何某をこの場所から解放することなかれ！』と唱えるべきである<sup>22)</sup>。

1.2.4.17 次に、二度〔木剣を〕投げつける 『神々を祈献する大地よりアラルを退治せんことを！』(VS.1.26a)と〔唱えて〕 かつて実にはアラルは阿修羅・羅刹であった。神々は彼をこの〔大地〕から撃退した。それと同様に、この〔祭官〕( = Adhvaryú-)はこの〔大地〕から撃退する 『牛の住まいである放牧地へ行くべし！天は汝に雨降るべし！サヴィトリ神よ、この大地の果てと結びつけるべし、百の縄によって！われらを嫌うもの、またわれらが嫌うものをこの場所から解放することなかれ！』(b-d)と〔唱えて〕

1.2.4.18 アグニードは彼(アラル)を押さえつける 『アラルよ、天界まで飛行することなかれ！』(VS.1.26e)と〔唱えて〕 実に神々は阿修羅・羅刹であるアラルを撃退したとき、彼(アラル)は天界まで飛行しようとした。アグニは彼を押さえつけた 「アラルよ、天界まで飛行することなかれ！」と〔願って〕 彼は天界まで飛行することはなかった。それと同様に、まさにアドヴァリユこそがこのようにこの世界から彼を締め出し、アグニードは天界から〔彼を締め出すのである〕それゆえ、彼はこのようになるのである。

1.2.4.19 次に、三度〔木剣を〕投げつける 『汝の滴りが天界まで跳ねることなかれ！』(VS.1.26f)と〔唱えて〕 実にこの滴りは生き物たちが生活するための彼らのエッセンスである。〔ゆえに〕『汝のこれ(滴り)が天界まで飛行することなきように！』と〔彼は唱えるのである〕〔続いて〕彼はこのように唱える 『牛の住まいである放牧地へ行くべし！天は汝に雨降るべし！サヴィトリ神よ、この大地の果てと結びつけるべし、百の縄によって！われらを嫌うもの、またわれらが嫌うものをこの場所から解放することなかれ！』と。

1.2.4.20 実に彼は3回、祈献文とともに〔木剣を〕投げつける。実に3つから成るものはこの世界である。まさにこれらの世界に彼はこのもの(アラル)を押さえつけるのである。実に、本来これらの世界なるものはそれ(祈献文)であり、また、本来祈献文なるものはそれ(世界)である。それゆえ、彼は3回祈献文とともに〔木剣を〕投げつけるのである。

1.2.4.21 4度目は黙って〔木剣を投げつける〕 第4の〔世界〕がこれら〔3つ〕の世界を越えて存在しようとしまいと、彼はまさにそれによって敵意をもつ対抗者を退治する。実に第4の〔世界〕がこれら〔3つ〕の世界を越えて存在するか否かは不明である。また、黙っていると〔真意は〕不明である。それゆえ、4度目は黙って〔木剣を投げつけるのである〕 (ŚB. 1.2 未了)

---

<sup>22)</sup> 註3)の箇所と同じ構文。